

「心の理論」の視点研究への応用

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
山田義裕

1 はじめに

- (1) a. 視点研究とは？
 - i. 錯視 (visual illusion)
 - ii. 文芸評論
 - iii. メディア研究
 - iv. 直示 (deixis) 現象の経験的研究
- b. 心の理論 (a theory of mind) とは？
 - i. 他者の心を読み、他者の心の動きを推論する能力
 - ii. 私たちの他者認識や自己理解の生物学的基盤
- (2) 本発表の目的
心理学等の分野で展開されてきた「心の理論」研究が言語使用の理論的 / 経験的研究 (pragmatics) にどのような意味をもつかを考察
- (3) a. 理論的意義：語用論 (pragmatics) を精神 (mind) の研究として展開する新たな可能性
b. 経験的意義：直示 (deixis) の現象についてこれまでに提案されているいくつかの記述の一般化に対して、原理に基づく統合的な説明ができる可能性

1.1 「心の理論」とは]

- (4) 「心の理論 (a theory of mind)」とは
他者の心を読み、他者の心の動きを推論する能力。私たちの他者や外界の認識 (= 自己認識) の生物学的基盤。^{*1}
- (5) 「心の理論」に関する研究の展開
 - a. プレマックとウッドラフによるチンパンジーの他者理解についての研究 (Premack and Woodruff (1978) など)
 - b. フランス・ドゥ・ヴァールの野生チンパンジーの政治的かけひきの観察 (de Waal 1982)
 - c. フランス・ブローエイによる野生チンパンジーの「二重の欺き」の観察 (バーン 1998:194-195)
 - d. ウィマーとパーナーによる人間の幼児期における発達研究 (Wimmer and Perner (1983) など) (誤信念課題の導入)
 - e. バロン=コーエンらの自閉症の研究 (Baron-Cohen, Leslie and Frith (1985)、Baron-Cohen (1995))

^{*1} Premack and Woodruff (1978) の “a theory of mind” の簡潔な定義: “the individual imputes mental states to himself and others.” (p. 515)

など)

- f. ボヴィネリの “guesser-knower” モデルによる心の理論の測定 (Povinell, Nelson and Boysen 1990)
- g. コールとトマセロの “hider-communicator” モデルによる人間の幼児とチンパンジーの心の理論の比較研究 (Call and Tomasello 1999)

1.2 「心の理論」の発達—「誤信念 (false belief)」課題による実験

Wimmer and Perner (1983) は、人間の幼児の心の理論の発達過程を探るために「誤信念 (false belief)」課題^{*2}とよばれる実験を開発した。この実験の概略は、子安 (2000:96-97) に分かりやすく述べられている。これらの実験に基づいて、人間の場合、三歳ではまだこの能力はなく、四歳ころから発達すると考えられている。

(6) 子安の誤信念課題の解説 (子安 2000:96-97)

パーナーらの「誤まった信念」課題を簡略化して説明すると次のようになる。最初に、人形劇などによって、次のようなお話を子どもに聞かせる。

「マクシは、お母さんの買い物袋をあける手伝いをしています。マクシは、後で戻ってきて食べられるように、どこにチョコレートを買ったかをちゃんとおぼえています。その後、マクシは遊びに出かけました。マクシのいない間に、お母さんはチョコレートが少し必要になりました。お母さんは<緑>の戸棚からチョコレートを取り出し、ケーキを作るために少し使いました。それから、お母さんはそれを<緑>の戸棚に戻さず、<青>の戸棚にしまいました。お母さんは卵を買うために出ていき、マクシはお腹をすかせて遊び場から戻ってきました。」

マクシという男の子を主人公とするこういうお話を聞かせた後、「マクシは、チョコレートがどこにあると思っているのでしょうか?」という質問をする。これに対して、子どもが「<緑>の戸棚」を選ぶと、マクシの「誤った信念」を正しく推測することができたということになる。

1.3 「心の理論」と精神のモジュール仮説

(7) 精神のモジュラー仮説 (The modular theory of mind)^{*3}

私たちの精神は一般的な汎用 (all-purpose) システムではなく、それぞれ独自の機能・構造をもつサブシステムが相互に関係して機能するモジュラー型システムである。

(8) 独立した認知モジュールとしての「心の理論」(Baron-Cohen 1995, etc.)

Mental module accounts hold that our theory of mind is handled by a specialized piece of mental hardware: Some part of the brain is dedicated to theory of mind processing. (Doherty 2009: 49)

^{*2} サリーとアン課題ともいう。

^{*3} あるシステムが、それぞれ独自の機能・構造をもつ単位から構成されている場合、その構成単位を module という。

2 生成文法と語用論

- (9) The Cognitive Revolution — the first conceptual shift
Generative grammar arose in the context of what is often called “the cognitive revolution” of the 1950s, and was an important factor in its development. Whether the term “revolution” is appropriate or not can be questioned, but **there was an important change of perspective: from the study of behavior and its products (such as texts), to the inner mechanisms that enter into human thought and action.** The cognitive perspective regards behavior and its products not as the object of inquiry, but as data that may provide evidence about the inner mechanisms of mind and the ways these mechanisms operate in executing actions and interpreting experience. (Chomsky 2004:381-382)
- (10) The basic questions about knowledge of language (Chomsky 1986:3) *4
a. What constitutes knowledge of language? (Nature)
b. How is knowledge of language acquired? (Origin)
c. How is knowledge of language put to use? (Use)
- (11) a. 知覚 (perception) の問題 — 構文解析 (parsing) の研究
b. 産出 (production) の問題 — これまででは取り組みが殆どない
- (12) Descartes’s problem on language use
「人間は状況に適した (appropriate to the situation) 言語表現を使うことがどうして可能なのか」という「言語使用の創造的側面 (“the creative aspect of language use”)」を明らかにすること
- (13) Chomsky’s view on pragmatics
My own view has always been stronger than what you quote from Levinson: “a general linguistic theory must incorporate pragmatics” not only “as a component or level in the overall integrated theory,” but as a central and crucial component. (Stemmer 1999:398)

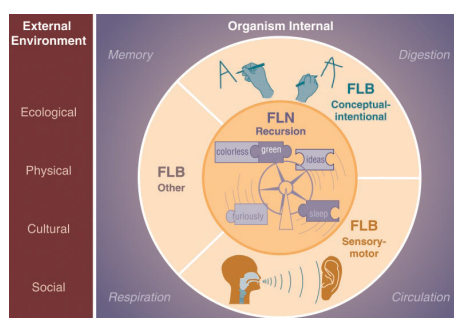
2.1 認知システムと運用システム

- (14) 認知システム (cognitive system) と運用システム (performance system)
There is good evidence that the language faculty has at least two different components: a “cognitive system” that stores information in some manner, and performance systems that make use of this information for articulation, perception, talking about the world, asking questions, telling jokes, and so on. ... The performance systems can be selectively impaired, perhaps severely so, while the cognitive system remains intact, and further dissociations have been discovered, revealing the kind of modular structure expected in any complex biological system. (Chomsky 2000a:117)

*4 Chomsky (1988:3) では、さらに (i) の問題が新たに加えられている。

(i) What are the physical mechanisms that serve as the material basis for this system of knowledge and for the use of this knowledge?

(15) FLN and FLB (Hauser, Chomsky & Fitch 2002:1570)



(16) Use の問題への取り組みが不十分だった理由

言語使用の問題が、以前から強く意識されていたにもかかわらず、これまで大きな研究の進展がみられなかったのにはいくつか理由があると思われる。まず第一の、そしておそらく一番大きな理由は、言語使用の問題はいくつかの要因が複雑に絡む極めて難解な問題であり、適切な経験的問題が提起できなかったからであろう。二つ目の理由は、これまでの生成文法研究では言語機能の特性の解明にその多くの労力が注がれ、ごく最近まで言語機能（認知システム）の特性を考える際にそれと隣接する運用システムとの関連で考察することは実質的に行ってこなかった点にあると思われる。言語使用の研究というのは、後で議論するように、まさに認知システムと運用システムとの相互作用についての研究である。認知システムを運用システムから切り離して、その特性を理論的に考察する研究が盛んな時期には、言語使用研究に目が行かなかったのは自然なことかもしれない。三つ目には、言語の使用に関連すると思われる認知研究の分野において生成文法の言語研究に大きなインパクトを与えるような発見が、少なくとも生成文法と相容れる形では存在しなかったことも原因かもしれない。(山田 2003:49)

2.2 今後の言語使用研究の可能性

(17) 極小モデル以後の認知システムと運用システムとの相互関係の研究

ちなみに、生成文法理論の主な対象である言語機能の認知システムの特性が、このように運用システムによって「動機づけられる」(motivated) という発想は、極小モデル以前の枠組みにおいては希薄であった。むしろ、認知システムの自律性を否定するものとして等閑視する傾向さえ認められた。極小モデルにおいても、むしろ認知システムの自律性は保持されているが、認知システムが一般的認知機構の中で占める位置に注目することによって、それが示す諸特性のすくなくとも一部が運用システムからの要請の結果であることを明確に認めた点において、従来の枠組みから大きく一歩踏み出したと言える。極小モデルの出現によって認知システムと運用システムとの間の相互の研究に新たな地平が拓けたと言っても過言でないと思う。(福井 2001:88-89)

(18) 「精神 (mind) の研究」としての語用論

語用論あるいは言語使用の研究は、言語機能の中核にある認知システムが生み出す言語表現を、認知システムとは独立した特性をもつ運用システムがどのように解釈するのかを明らかにすることを目的とする。(山田 2003: 51)⁵

⁵ この目標の裏にあるのは、次のような言語使用の研究に対する見方の変化（あるいは明確化）である。つまり、言語知識の使用の

3 直示表現 (deictic expression) の視点研究

- (19) 視点 (viewpoint) とは何か
物や人や事態を眺める時の見る人の立場。

3.1 視覚認識における視点の重要性

- (20) 視覚の「スナップショット・モデル」(snapshot vision)
私たちが出来事や事態を眺める時、視点つまりカメラアングルは一カ所に固定されるのが普通である。^{*6*7}
- (21) 錯視 (visual illusion) と視点
- a. Wittgenstein's duck-rabbit
 - b. A Necker cube
 - c. impossible object (e.g. the Penrose triangle)
 - d. Escher's impossible figures

3.2 言語使用における視点の重要性

- (22) 視点と直示表現^{*8}
- a. 指示語 (demonstratives) :
これ/それ/あれ、ここ/そこ/あそこ
 - b. 呼称 (address terms) :
ぼく、きみ、お母さん、先生

3.2.1 視点の一貫性の原則—日本語の授受動詞の使用を例に

- (23) 視点の一貫性の原則
話し手の視点は一つの文において一貫してはならない。^{*9}
- (24) 日本語の授受動詞 (やる-くれる)
- a. 太郎は花子に本をやった。
 - b. 太郎は花子に本をくれた。

問題を、言語表現が言語的文脈の中でどのように「使用」されるのかという機能的観点からではなく、言語知識がそれと関連する運用システムとどのように相互作用するかという観点から研究する試みが必要だという考えである。Chomsky (2002:106-107) を参照。

^{*6} 「知覚の流動モデル」との対比については、Gibson (1986L1)、宮崎・上野 (1995:4-9) を参照のこと。





^{*7} ピカソの描くキュビズムの人物画 (目は二つで正面を向いているが、鼻は横向き) は、私たちの「単一視点」の視覚システムの特徴を逆手にとった「多視点」の絵画技法である。

^{*8} 直示性 (deixis) : 発話の行われる場面との関連においてのみ了解がなりたつような言語表現の性質 (三省堂英文法辞典)

^{*9} Kuno(1987) では Empathy (共感度) という概念を用いて、この原則を次のように述べている。

Ban on Conflicting Empathy Foci: A single sentence cannot contain logical conflicts in empathy relations.


- (25) a. うちの太郎がとなりの花子に本をやった。
 b. *うちの太郎がとなりの花子に本をくれた。
 c. となりの太郎がうちの花子に本をくれた。
 d. *となりの太郎がうちの花子に本をやった。

- (26) 三つの視点 ( : 「話者の視点」)
 太郎 ⇒ 本 ⇒ 花子
 



- (27) 授受動詞 (やる くれる) の特性
 a. 話し手の視点が与える人 (主語) にある場合 : やる
 b. 話し手の視点が受け取る人 (与格目的語) にある場合 : くれる
 c. 話し手の視点が中立の場合 : やる


- (28) 「うちの X」 vs. 「となりの Y」
 「うちの X」と「となりの Y」が文中に共起している時、話し手の視点は「うちの X」に置かれる。

- (29) (25a) vs. (25b)
 うちの太郎 ⇒ 本 ⇒ となりの花子


- (30) (25c) vs. (25d)
 となりの太郎 ⇒ 本 ⇒ うちの花子


- (31) a. 僕が太郎にお金をやった。
 b. *僕が太郎にお金をくれた。
 c. 太郎が僕にお金をくれた。
 d. *太郎が僕にお金をやった。

- (32) (31a) vs. (31b)
 僕 ⇒ 金 ⇒ 太郎


- (33) (31c) vs. (31d)
 太郎 ⇒ 金 ⇒ 僕


- (34) 話し手第一視点の原則 ^{*10}
 話し手は、常に自分の視点をとらねばならず、自分よりも他人寄りの視点をとることができない。

^{*10} Kuno(1987:212) では、これは “Speech Act Emptay Hierarchy” と呼ばれている。


3.2.2 「話し手第一視点の原則」からの逸脱現象 視点の移行

(35) おかあさん：太郎、ごはんができましたよ。
太郎：いま行くよ。 / *いま来るよ。


(36) Mother: Dinner's ready, Taro.
Taro: I'm coming. / *I'm going.

(37) a. あなたの家に赤ちゃんを連れて行きます / *連れて来ます。
b. I'll bring/*take my baby to your house.

(38) 第三者間の移動 (: 動く主体/出発点側の人、 : 到着点側の人)

a. 行く-go : 視点 () は出発点
出発点 到着点



b. 来る-come : 視点 () は到着点
出発点 到着点



(39) 話し手と聞き手間の移動 (: 移動する人)

a. 行く-come ((40a,b) vs. (41a,b))
話し手 聞き手



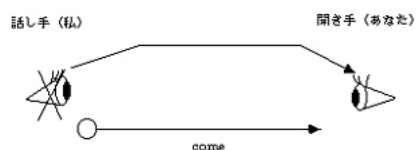
b. 行く-come ((40c,d) vs. (41c,d))
話し手 聞き手



(40) a. すぐにあなたのところに行きます。
b. *すぐにあなたのところに来ます。
c. 3時にパーティーに行きますので、そこでお会いしましょう。
d. *3時にパーティーに来ますので、そこでお会いしましょう

(41) a. I'm coming to you soon.
b. *I'm going to you soon.
c. I will come to the party about 3 o'clock tomorrow afternoon. Please be there.
d. *I will go to the party about 3 o'clock tomorrow afternoon. Please be there.

(42) 視点の移行 *11



(43) a. Who is this? / そちらどなたですか?

b. Is this Taro? / そちら太郎ですか? t

(44) a. You can have that. / これあなたにあげるわ.*12

b. How about there? / このあたりはいかがでしょう? (国広 1985)

c. Take that. / これでもくらえ.*13

(45) a. お前ん家に来っけん

b. でん出らりゅうば (出て行けるのならば)

出てくるばってん (出て行きますけど)

でん出られんけん (出て行かないので)

出て来んけん (出て行きません)

こん来られんけん (行かないので)

来られられんけん (行かないから)

来ん 来ん (行かないよ、行かないよ)

4 人を表すことば—呼称と自己表現

(46) 人を表すことば—呼称と自己表現

- 人称代名詞
- 固有名詞
- 親族名称 (家族・社会の関係表現)

4.1 日本語の呼称の使用—対称詞と自称詞の使用について

(47) 日本語の家族の呼称の基本原則 (鈴木 1973:149)

自分を基準に相手がそれより上か下か、つまり目上と目下という対立概念に基づいて呼び方 (人称代名詞・固有名詞・親族名称) を変える。

*11 Lyons (1977: 579) の “deictic projection” の議論を参照のこと。

*12 Cecilia: Oh, what—wait a minute, what am I thinking? Look here, I’ve got a whole bag of popcorn ...
Tom: Wow!

Cecilia: You can have that. (From the script of *The Purple Rose of Cairo*)

*13 “Jim,” he whispered, “take that, and stand by for trouble.”(from Stevenson’s *Treasure Land*) (「ジム」シルバーはささやいた。「これをもっとけ、何かあったときのための備えだ」)

4.2 家族の呼称の一般的パターン

4.2.1 対称詞の使用 (相手を呼ぶ場合)

(48) 目上に対して

- 人称代名詞 (あなた、おまえ): ×
- 固有名詞 (太郎、山田): ×
- 親族名称 (お父さん、お姉ちゃん):

(49) 目下に対して

- 人称代名詞 (あなた、おまえ):
- 固有名詞 (太郎、花子):
- 親族名称 (妹ちゃん、娘ちゃん): ×

4.2.2 自称詞の使用 (自分を指す場合)

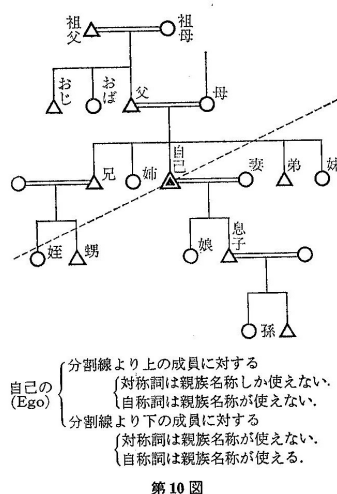
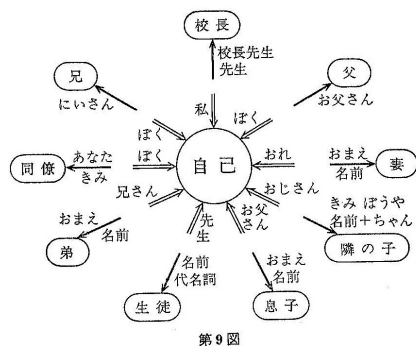
(50) 目上に対して

- 人称代名詞 (私、僕):
- 固有名詞 (太郎、花子):
- 親族名称 (娘、弟): ×

(51) 目下に対して

- 人称代名詞 (私、僕): ?
- 固有名詞 (太郎、花子): ×
- 親族名称 (お父さん、お姉ちゃん):

(52) 鈴木 (1973: 148, 150)



4.3 日本語の親族名称の使用に見られる視点の移行

(53) 日本語の親族名称の使用における話し手第一視点の原則 (予備的仮定)

日本語の親族名称の使用は、基本的には話し手第一視点の原則に従う。つまり、親族名称を用いる場合は自分自身の視点から見た関係を示す表現を用い、自分以外の人の視点を通して見た親族名称の使用は、一般的には不自然である。

(54) 話し手第一視点からの逸脱の事例

…私の乗っていた国電山手線が、新宿駅に着いた時のことである。車内の乗客のほとんどが降りて、席がガラすきになったと思うや、どっと新しくお客が乗り込んできた。私の隣に足早にかけより席を占めた老婦人が、自分の側の座席を掌でたたきながら、「ママここにいらしゃい」と怒鳴ったものである。すると乗客の中から、赤ん坊を抱いた若い娘が現れて老婦人の側に座った。明らかに、母親が娘をママとよんだのである。… (鈴木 1973:167)

4.3.1 親族名称を自称詞として使用する場合

(55) 目下に対する視点の移行 視点の移行の方向性

- a. (姉が弟に): 今度の日曜日、お姉ちゃんと動物園に行こう。
- b. (弟が姉に): *このおもちゃ、弟ちゃんにかしてちょうだい。

(56) 鈴木 (157:153)

話し手は自分の目上に対し、自分を相手の立場から眺めた親族名称を使えない。

4.3.2 親族名称を対称詞・他称詞として使用する場合

(57) 目下に対する視点の移行

- a. (太郎の母が自分の父に): 太郎がおじいちゃんと遊びたがっているんだけど、今おじゃましていいかしら。
- b. (母親が次男に): 留守中は、お兄ちゃんとけんかしないようにね。

(58) 親族名称の第二の虚構的用法 (鈴木 1973:171)*¹⁴

- a. 日本の家族内で、目上の者が目下の者に直接話しかけるときは、家族の最年少者の立場から、その相手を見た親族名称を使って呼びかけることができる。
- b. 目上の者が眼下のものを相手として話す時、話の中で目上が言及する人物が、相手より目上の親族である場合に、話し手はこの人物を自分の立場から直接とらえないで、相手つまり目下の立場から言語的に把握する。

*¹⁴ 普通言われる親族名称の虚構的用法とは、血縁関係のない他人に対して親族名称を使うケースである。例えば、若者が自分とは血縁関係のないお年寄りに「おじいさん」や「おばあさん」と呼びかけるような場合である。また、第二の虚構的用法を oikonymy という概念を用いて分析する試みについては鈴木 (1998) 所載の論文「テクノニミー (teknonymy) という概念について」を参照。

5 視点の移行と「心の理論」

5.1 正高 (1999) の視点表現獲得の研究

(59) 心の理論の発達には視点表現 (行く・来る) 獲得の必要条件。

(60) 正高 (1999) の実験

- a. 小学校 1 年生 100 人を対象にして、彼らが往来動詞「行く・来る」の使い分けの程度を調査
- b. 「行く」の使用と「来る」の使用、それぞれについて対話によるテストを一人につき 20 回行い (合計 4000 試行) 全体で正答率が 54 パーセント
- c. 正高の仮説: 「行く・来る」の習得には心の理論の発達が必要条件
- d. 仮説の検証方法: 「行く・来る」の適切な使い分けができるグループ (39 名) と使い分けができないグループ (45 名) に分け、それぞれに対して心の理論の発達を確かめる誤信念課題のテストを実施
- e. 実験結果: 適切な使い分けができるグループでは 39 人中 38 名が誤信念課題をクリアしたが、一方適切な使い分けができないグループでこの課題をクリアできたのは 45 人中 29 名にとどまった
- f. 結論: 心の理論が「行く・来る」の習得の必要条件

参考文献

- Baron-Cohen, S., Leslie, A.M. and U. Frith (1985) "Does the autistic have a 'theory of mind'?" *Cognition* 21, 37-46.
- Baron-Cohen, S. (1995) *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. MIT Press. (長野敬・今野義孝・長畑正道 (翻訳) 『自閉症とマインド・ブライントネス』) 青土社
- Byrne, R. and A. Whiten (1988) *Machiavellian Intelligence: Social Expertise and the Evolution of Intellect in Monkeys, Apes, and Humans*. (Oxford Science Publications) Oxford Univ. Press. (藤田 和生・山下 博志・友永 雅己 (翻訳) 『マキャベリの知性と心の理論の進化論 ヒトはなぜ賢くなったか』) ナカニシヤ出版
- Byrne, R. (1991) *The Thinking Ape: The Evolutionary Origins of Intelligence*. Oxford Univ. Press. (小山 高正・伊藤 紀子 (翻訳) 『考えるサル 知能の進化論』) 大月書店
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Praeger Publishers.
- Chomsky, N. (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*. MIT Press.
- Chomsky, N. (1995a) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Chomsky, N. (2000a) *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (2002) "An Interview on Minimalism," in Belletti, A. and L. Rizzi eds., *On Nature and Language*. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (2004) "Language and Mind: Current Thoughts on Ancient Problems," in Lyle Jenkins ed., *Variation and Universals in Biolinguistics*. (North-Holland Linguistic Series: Linguistic Variations Volume 62) Elsevier Press.
- Doherty, Martin J. (2009) *Theory of Mind: How Children Understand Others' Thoughts and Feelings*. Psychology Press.
- Fillmore, Charles (1997) *Lectures on Deixis*. CSLI Publications.

- 福井直樹(2001)『自然科学としての言語学—生成文法とは何か』大修館書店
- Gardner, Howard (1985) *The Mind's New Science: A History of the Cognitive Revolution*, Basic Books. (佐伯胖・海保博之訳『認知革命 - 知の科学の誕生と展開』、産業図書)
- Gibson, James (1986) *The Ecological Approach To Visual Perception*. Psychology Press.
- Hauser, M. D., Chomsky, N. and W. T. Fitch (2002) "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?" *Science* 29822, 1569-1579.
- 廣瀬幸生・加賀信弘(1997)『指示と照応と否定』研究社出版
- Kasher, A. (1991) "Pragmatics and Chomsky's Research Program," in Kasher (1991).
- Kasher, A. (1991) *The Chomskyan Turn*. Basil Blackwell.
- Keenan, Julian Paul, P. and Gordon G. Gallup and Dean Falk (2003) *The Face in the Mirror: How We Know Who We Are*. HarperCollins Publishers. (『うぬぼれる脳—「鏡のなかの顔」と自己意識』NHK ブックス)
- 子安増生(1997)『子供が心を理解するとき』金子書房
- 子安増生(1999)『幼児期の他者理解の発達 心のモジュール説による心理学的検討』京都大学学術出版会
- 子安増生(2000)『心の理論 心を読む心の科学』岩波書店
- 子安増生・大平英樹(編)(2011)『ミラーニューロンと<心の理論>』新曜社
- 国広哲弥(1985)「言語学道場」『言語』第14巻第3号、大修館書店、東京
- 久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, The Univ. of Chicago Press.
- Lyons, John (1977) *Semantics: Volume 2*. Cambridge University Press.
- 正高信男(1999)「認知と言語」『ことばの獲得』桐谷滋編、ミネルヴァ書房
- 正高信男(2001)『子どもはことばをからだで覚える メロディから意味の世界へ』中公新書
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究』南雲堂、東京
- Povinell, D. J., Nelson K. E. and S. T. Boysen (1990) "Inferences about guessing and knowing by chimpanzees," *Journal of Comparative Psychology*. 104. 3. 203-210.
- Premack, D. and G. Woodruff (1978) "Does the chimpanzee have a theory of mind?" *The Behavioral and Brain Science*, 1. 515-526.
- Stemmer, B. (1999) "A On-Line Interview with Noam Chomsky: On the Nature of Pragmatics and Related Issues," *Brain and Language* 68, 393-401.
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書
- 鈴木孝夫(1996)『教養としての言語学』岩波書店、東京
- 鈴木孝夫(1996)『鈴木孝夫 言語文化学ノート』大修館書店
- 田窪行則(編)(1997)『視点と言語行動』くろしお出版
- Tomasello, Michael (2001) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press.
- de Waal, Frans (1982) *Chimpanzee Politics: Power and Sex Among Apes*. Jonathan Cape.
- Wimmer, H. and J. Perner (1983) "Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception," *Cognition* 13.1, 103-128.
- 山田義裕(1999)「言語伝達と指示表現 指示詞と呼称の用法をめぐって」『言語文化部研究報告叢書』(北海道大学) Vol.36, 245-259. *The Northern Review* Vol. 31, 47-61.
- 山田義裕(2003)「生成文法と語用論 共感度研究の再評価」*The Northern Review* Vol. 31, 47-61.